

実践力養成型インターンシップ
インターンシップフェア

挑戦してみませんか?
**企業人と取り組む
 本気の1ヶ月**

**プロジェクト紹介
 パンフレット**



文部科学省
地(知)の拠点

2016年6月2日
 徳島大学COCプラス推進本部

実践力養成型インターンシップ
 プロジェクト紹介パンフレット

目次

3
ペ
ー
ジ

大塚テクノ株式会社

未来を生み出す優秀な人材に
 テクノで働く魅力を伝える



7
ペ
ー
ジ

一般社団法人徳島新聞社

若者のwantsを探る
 取材と紙面づくりの実践



5
ペ
ー
ジ

日本フネン株式会社

年間18万枚のドアを製造する
 生産ラインの改善の検討



13
ペ
ー
ジ

NPO法人マチトソラ

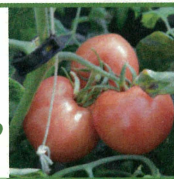
5000人以上の人が集まる
 うだつマルシェを進化させる



15
ペ
ー
ジ

有限会社榎山農園

アグリビジネスを成功させる
 webコミュニケーションを考える



17
ペ
ー
ジ

徳島大学上勝学舎

多様な地域資源を活用した
 地域活性化の拠点づくり



21
ペ
ー
ジ

あたらしい暮らし方働き方開発ラボ

サテライトワーク先進地域で行う
 インターンシップを企画する

番外編



未来を生み出す優秀な人材に テクノで働く魅力を伝える

鳴門市を拠点グローバルに事業展開を行う企業の魅力を
全国の技術者&ビジネスパーソンの卵に向けて発信します。



徳島県鳴門市
大塚テクノ株式会社

どのような事業を 行っている 企業(組織)ですか?

大塚テクノの歩みは、医療品の輸液容器プラスチック部材の開発・製造から始まりました。現在は、国内だけに留まらず、海外へも生産拠点を拡大しています。また、医薬品のプラスチック製造で培った成形技術を生かし、電子分野への参入にも成功し、LEDパッケージ製品の製造に加えて、2013年にはリチウムイオン電池の安全装置の製造を開始しています。需要の広がる医療分野と電子分野へ、高い品質と技術を武器に、更に海外にも活躍の場を広げていきます。

事業としては、「医療製品」と「精密製品」を事業の柱として展開しています。医療製品としては、点滴用のバッグやキャップ、薬品を保管するためのケースなど、用途に応じた軽くて丈夫なプラスチック製品を最も得意としています。また、喘息治療用の薬剤吸入デバイスや人工透析の医療機器の製造なども行っており、海外拠点を中心に販売を広げています。これからも医療現場のニーズを拾い上げ、それを的確に製品に反映させていきます。



「精密製品」としては、医療用品の開発が技術的な基礎になっており、プラスチックを熟知しているため高付加価値のプラスチック素材を使うことができます。例えば、スーパーエンジニアリングプラスチックと呼ばれる素材は、機能設計によって、金属と同じ性質を与えることができます。耐熱性、耐薬品性、導電性、耐久性、耐磨

耗性を高め、精密機器の部品として利用します。金属の代替ではなく、金属を超えるプラスチック製品を生み出すことができます。さらに、高いプラスチック成形技術があるので、ミクロン単位での精密な製品を作ることができ、プラスチックと金属を組み合わせた複合材も生産しています。また、製品の機能や安全性、耐久性を高めることも可能です。この技術は様々な電子機器に使われ、特にLEDの普及に伴って生産を伸ばしてきました。

新規事業としては、大塚テクノの新たな事業の柱となるオリジナル製品としてサマルプロテクターの生産を行っています。サマルプロテクターは、これからはますます普及することが予測されている。リチウムイオン電池の安全装置です。これまでのプラスチックと、その成形技術を土台としながら新しい技術を取り入れた製品です。

どのような課題に これから取り組んで いきますか?

医療関連製品と精密関連製品の両分野にわたり高度な技術と競争力を持つ大塚テクノでは、グローバルな事業展開を進めています。急速な事業拡大に伴い、即戦力となる優秀な技術者を獲得することが、喫緊の課題となっています。求める技術やスキル、人物像と合致した方に、如何にして大塚テクノで働く魅力を情報として届けるか、この方法を見つけることを重要な課題と考え、人材確保に向けたブランディングとPRにさらに力を入れます。



挑戦するプロジェクトについて

大塚テクノは世界的に見ても非常に高い技術と競争力を持った企業です。しかし、昨今は国内景気が回復基調で推移し、企業の新卒採用が大幅に増える傾向にあり、中小企業にとって生命線でもある人材確保が厳しい状況になっています。そこで本プロジェクトでは、働く先としての大塚テクノの魅力を抽出し、その魅力を効果的にPRする方法を検討してもらいます。採用対象と目線の近い学生のみならず取り組んでもらうことで、多くの優秀な方に弊社に興味を持ってもらえる成果が出ると期待しています。

project 未来を生み出す人材に テクノの魅力をPR

【プロジェクトの目的】

優秀な人材に関心を持ってもらうためには、徳島県だけでなく、全国に向けて大塚テクノの技術、製品の競争力、仕事に対する研究者・技術者としてのやりがい、そして研究・開発を支える部門のやりがいを発信していかなければなりません。また、大塚テクノで働くことについて、私たち自身が現在まだ気がついていないメリットを探り、発信できる強みを増やしていくことも必要です。プロジェクトでは、新しい大塚テクノの強みを見つけるブランディングと、ターゲットに的確にその強みを伝えるPRの視点を持って、人材登用のための効果的な手段・方法を考察してもらいます。

【具体的な活動】

まずは、会社が求める素養を持った採用対象学生にとって、弊社で働くことが魅力に感じられるような弊社の強みをリサーチしてもらいます。弊社社員に求める素養には、「業務に合致した技術を持っている方」という視点もありません。また、「アフレック」な人、自分事として仕事に打ち込める人と共に働きたいと思っています。そのようなターゲットの目標を持って、社内の様々な方にインタビューを行うことで、弊社の強みを探ります。また、同業他社が捉えている自社の強みと、その発信方法を考えることは、プロジェクトを進めるための大きな手がかりになります。合わせて、業界のリサーチも行います。

発信すべき強みが明らかになったら、それを効果的に伝える方法を検討します。学生を対象としたインタビューなど、参考になる情報を集めながら、弊社の強みが効果的に伝わるPR方針(媒体、構成、伝えるべき情報やメッセージ等)の検討を進めます。方針ができれば、社内でプレゼンテーションを行います。承認が出れば、実際のPRの作成に取り掛かります。

最終的には、みなさんが作成した方針に沿って、ホームページの内容の拡充や、企業紹介パンフレットの作成まで取り組んでいただきます。**【求められる成果】**「リサーチ→提案作成→プレゼンテーション→承認→提案に沿った事業実施」の企画における企業立案業務の一連の流れを経験してもらいます。目に見える成果物としては、ウェブサイトやパンフレットの作成ですが、そこに至るまでの各段階のハードルを超えることが、本プロジェクトでは求められます。



挑戦する学生へのメッセージ



大塚テクノ人事総務部長
千葉雄介

当社は100年後も顧客満足のために存続し続けるために、メーカーとして新しい価値を持つ製品を世の中に提供し続ける集団であらうと願っています。そのため、人材育成が最重要課題であると認識しています。新しい価値とは何か。市場が求めているものは何か。そのために今何をすべきか。こういった将来の大塚テクノにとって

重要な課題と一緒に取り組んでもらえる優れた人材に、どうすればアプローチできるのか。みなさんにはまさしく大塚テクノが今後も新しい価値を創造し続けるために必要なくみづつに取り組んでもらいます。非常に重要な事業ですので、時には厳しく接することもあります。が、諦めず成功体験と達成感をつまみ取ってください。

年間18万枚のドアを製造する 生産ラインの改善の検討

新築分譲マンションを中心とした玄関ドアトップシェア企業にて
生産技術の基盤となる生産ライン改善の課題解決に取り組めます。



徳島県吉野川市
日本フネ株式会社

どのような事業を 行っている 企業(組織)ですか?

日本フネは玄関ドアを中心とした「建築資材を製造・販売する会社です。社名に「フネ(不燃)」とあるように、建築物に対して、「不燃」「防火」「耐火」性能と機能性の高い建築資材を開発してきました。更に、「断熱」「防音」「防犯」「防震」などの新たな機能に加え、新素材を駆使した製品開発を日々重ね、年間18万枚以上のドアの製造・販売を行っています。特に分譲と賃貸を合わせたマンションの玄関ドアでは、業界トップシェアの45%が日本フネ製です。主要な顧客は、マンション・オフィスビル・ホテル等の施主・デベロッパー、ゼネコ、設計事務所などになります。このように様々な顧客の要望に応えられる高い水準の製品を開発しています。市場に受けられている理由としては、安全性・機能性・快適性に加えて、悪意性(デザイン性)の評価の高さやオーダーメイド商品を既製品と同等の価格で提供できる価格競争力や、豊富な品揃えなどがあげられます。



また、近年はLEDやリサイクル素材を使った新建材など、環境製品の開発も行っています。信号機は、自然光球式から省エネルギー効果の高いLED式に変わりつつありますが、信号機本体を新規に設置しなければならないので多大な経費がかかり、十分には普及していないのが現状です。そこで、まだ十分に使用可能な信号機本体をそのまま生かし、電球を取り換えるだけでLED信号機に変

えることができる歩行者信号機LED電球を、徳島県警察本部、徳島県立工業技術センターと共同開発しました。この取り組みは、地球温暖化防止活動環境大臣賞をいただくなど、社会的にも高く評価されています。このように、培った技術者自然環境や社会に還元する事業にも積極的に取り組んでいます。

どのような課題に これから取り組んで いきますか?

顧客の要望に応え続けるためには、日々生産技術・生産効率を高める必要があります。機械にできるものは機械に任せ、製造の現場が革新を続けることで、業務効率・収益性を高める必要があります。近年は海外の製造業において、IT技術の進歩を受けたインダストリー4.0などの考え方も出てきています。これまでは技術では、一つの製品を一つの製品製造ラインで一貫して製造するのが効率的な生産方式でした。IT技術が進歩を続ける今後は、生産を工程ごとに標準化したと同時に工場内あらゆる機器をインターネットに接続し、製品需要に応じて工程の組み替えを行っていくなど、自律的に生産ラインを考え出すスマートファクトリー方式が主流になっていくのではないかと考えられています。このような新技術の導入の検討も行いつつ、多様化する顧客のニーズに対応できる迅速な生産技術の開発を進めていくことが、これからの課題になっています。



挑戦するプロジェクトについて

日本フネの社訓は「創造・革新・挑戦」です。グローバル化時代の昨今、インダストリー4.0など製造業においても劇的な変化が訪れる時代になると言われていますが、日本フネは本格的な海外展開を視野に、常に変革するための取り組みを行っています。今回のプロジェクトでは、億ションと呼ばれるマンションの玄関ドアを製造する実際の製造過程に触れてもらい、若い方の柔軟な視点と意欲を持って、生産性向上につながる課題点を見つけてもらいます。

project 柔軟な視点で考える 生産性向上プロジェクト

【プロジェクトの目的】

日本フネでは、顧客だけではなく社員、関連企業、地域等、ビジネスに関わる様々なステークホルダーに信頼され続ける「ものづくり」のために、生産現場をはじめとして、常に変革する意識を持ち続けています。中いけると気がつかない課題に目を向けることも必要です。

一つは専門やものの見方にとらわれない若い方の意見から、思わぬ気づきを得られることもあります。柔軟な発想力、着眼点、パワーややる気を持った学生の視点で、現場の技術者と意見交換しながら生産ラインの課題を検証し、生産性を向上させるための改善点を提案して下さい。

【具体的な活動】

現在稼働しているドアの生産工程の現状把握と分析を行い、生産効率を上げるための改善案を検討・立案・検証します。その際、次の点を意識して取り組んでもらいます。

- ①作業の無理・無駄な点を見つけ、作業時間を減らす。
- ②人手作業を機械に置き換えられる点を見つける。
- ③工程を見直し、生産の流れをスムーズにする方法を考える。
- ④違和感を感じる点を見つけ、具体的に検証する。

【求められる成果】

みなさんが提案してくれた様々な改善提案を組み合わせ、設備導入した場合の作業時間を試算します。ハードルは高いかもしれませんが、作業時間を1/2に短縮する工程が出来ることを目標に、プロジェクトに取り組んでもらいます。



挑戦する学生へのメッセージ



日本フネ代表取締役社長
久米徳男

当社は一流の企業やお客様に直接アプローチできるという点で思っています。また、産・官・学など様々な専門機関との連携により、やる気さえあれば高い技術やノウハウを吸収できる環境があります。私は常に社員に夢とロマンを持ってほしいと話しています。インターンシップでは、様々な暮らしのニーズに応える性能を持ち、お客様から高く評価される製品の生産現場に触れることができます。

高い技術を持つものづくりの生産工程に触れることは、みなさんのこれからの人生設計と、将来の夢が広がる大きなきっかけになるはずです。さらに、インターンシップをきっかけに、夢を形にするチャレンジの場として日本フネで働くイメージを持って帰っていただければ、これほど嬉しいことはありません。

若者のwantsを探る 取材と紙面づくりの実践

徳島新聞の若者向けコーナーページの紙面作りを取り組みながら若者に響くこれからの新聞のあり方を検討します。



徳島県徳島市
一般社団法人徳島新聞社

どのような事業を行っている 企業(組織)ですか?

徳島新聞社は「県民と共に行く」を信条にした、徳島県民に寄り添う報道で高く評価されている新聞社です。朝刊、夕刊を発行し、地元ニュースから世界各地のニュースまで新鮮情報を幅広くお届けしています。県内外に取材拠点(支局)を多数設置し、多くのスタッフの力

情報の集結により新聞がつられています。朝刊部数は23万部を超え、世帯普及率74%超は全国有数の高さを誇っています。



新聞社の仕事は、大きくは社会で起きていることを取材して記事にする「記者」の仕事と、新聞をできるだけ多くの人に読んでもらうための事業を進める「営業」の仕事に分けられます。「記者」の仕事を行うにも、様々な部署があり、それぞれ役割があります。県内の企業や経済団体、官公庁を取材し、新技術・新製品の開発、決算情報、県独自の経済施策導入といったニュースを紹介する「政経部」、事件事故や地域のイベント、話題の県民、社

会問題など県内のあらゆるニュースを取材する「社会部」、読者が一目で分かるビジュアル性の高い紙面を作るため、日々さまざまなニュースを写真で追う「写真映像部」、紙面のレイアウトを行う「整理部」や、県内の教育機関で新聞を使った授業を新聞社側から支援する「NIE(Newspaper In Education)推進部」のような仕事もあります。

みなさんの手元に届く前に、様々な仕事を経て新聞は作られています。一度そのような目線を持って、徳島新聞の紙面を眺めてみてください。

どのような課題に これから取り組んで いきますか?

近年、若年層の新聞離れが深刻になっています。徳島新聞では、子供や若者が新聞に触れる機会を増やし、新聞を読むことが楽しくなるような取り組みを行っています。前述のNIE推進部では、実際に学校へ外出し、新聞読み方を説明する前授業や、職場体験、切り抜き新聞コンクールなどを、子供達に提供しています。若者に向けた発信としては、毎週日曜の朝刊に掲載されている、高校生を中心とした10~20代を応援する紙面「ニチヤン」があります。今年で45年を迎えた「ニチヤン」ですが、若者が欲しいと思える情報を提供し続けるために、適切な情報や編集の方法を常に模索しています。今後も多様な世代から愛される紙面作りに向けて、必要な情報を探り続けることが、新聞社に求められています。



挑戦するプロジェクトについて

徳島新聞の記者の言葉「事実」は小説よりも奇なり、という言葉がありますが、記者という仕事をしていた本当に思う。人に会おうということは、自分の想像を超える面白さがある。この面白さを伝えたい。」今回のインターンシッププログラムでは、徳島新聞で若者を対象に毎週日曜日に掲載されている「ニチヤン」の紙面計画を立案、取材、執筆、編集する一連の作業に携わり、若い読者が手元に置いて読みたくなる企画にしていけるために同世代の視点から調査、検証を行います。

project 若者のWantsから 始める新聞づくり

【プロジェクトの目的】

若者世代の新聞離れが進んでいると言われていて、しかし「新聞は読まないが、新聞社発信の情報は信用して読んでいる」といった学生の発言をよく耳にします。言葉通りに受け取ると、新聞社に取られる機会が少ないが、新聞記者が書いたニュースは信頼性が高く、読む価値のある情報だと考える学生が多いのではないのでしょうか。

だとすれば、学生のWantsをしっかりと捉え、欲しい情報を深掘りして、彼らが読み応えを感じる紙面を作り、学生に届く情報拡散方法を見つけ出していくことで、学生が手元に置いて読みたくなる新聞に近づけるのではないかと考えています。

そこで、本プロジェクトでは、学生の

視点から学生がどのような新聞を欲しているかを調査します。そして、調査結果をもとに紙面を作成してもらい、若者世代からどのような反応が帰ってくるかを受け止めながら、若者に響く新聞のあり方を考えてもらいます。

【具体的な活動】

学生が知りたいと思う、欲しいと思う情報を探るにはどのような方法があるでしょうか。プロジェクトでは、まずその調査方法から新聞記者と一緒に考えてもらいます。前半の課題として、様々な視点から学生の意見を収集し、整理した報告書を作成してもらいます。

後半は、整理した情報をもとに、徳島新聞の若者向けページ「ニチヤン」の企画と編集に取り組みしてもらいます。みなさんとテーマを決めて取材を行い、記事を執筆して「若者が手にしたくなる新聞紙面」としてニチヤンの1ページを完成させます。

【求められる成果】

参加するみなさんの力でニチヤンを1ページ完成させることを期待しています。もちろん、ただ完成させるだけでは不十分で、その紙面が本当に学生に受け入れられているか否かを調べ、次の課題を見つけて出すことも必要です。

ぜひ、読者の声も集めてもらいたいと思います。どのような形で声を集めるのか、どのような質問をするのかもみなさんと考えてください。最後にアンケートの結果も踏まえて、これからの新聞のあり方について発表してもらいます。



挑戦する学生へのメッセージ



徳島新聞記者
橋本真珠

記者として大切なのは、自分から面白いことを探してみようという好奇心です。観察力や発問を広げる努力も必要です。文章力なんて、その次か、そのまた次くらいでいいよ。ご縁あって今春入っている場所、徳島のことももっと知ってみませんか。そして徳島の未来をデザインしてみませんか。ニチヤンは10代、20代の人たちに届け

たい紙面です。今回のプロジェクトでは、同年代の皆さんに「記者」となってもらい、自分たちの世代が知りたい情報を考えながら、様々な取材に取り組みしてもらいます。身近なようでもまだ知られていないことをどんどん発信していきますよ。

徳島の課題を知るために 徳島の1000人とツナガル

人を動かす街を元気にするタウンコンテンツを考えるためにとにかく人と会ってひたすら徳島の課題を取材します。



徳島大学常三島キャンパスより自転車で10分
株式会社あわわ

どのような事業を行っている 企業(組織)ですか?

「徳島を元気にする」を企業ミッションに、徳島の生活者であるファンに支えられつつ、「街の暮らしに役立つ情報」や「街のハッピーな情報」をみなさんに届け続けています。一人でも多くの生活者に届けるために手段であるメディアは、時代の流れと共に変化させて

ています。月刊誌からは、ムック、フリーマガジン、WEBメディア等様々なメディアのカタチにチャレンジしています。

主要な事業はタウンコンテンツの編集・発信です。月刊誌や別冊の編集・発行、広告営業、企業・個人フレットやホームページの制作から運営まで行っています。近年は、創刊から30周年を迎えた『あわわ』をフリーマガジン『あわわfree!』にリニューアル、「ASA」『050』を統合して新雑誌『Geen』を創刊し、ウェブメディア『AWALOG』を創刊するなど、時代のニーズにあわせてタウンコンテンツの創出に様々な形で挑戦しています。



このような事業を進めるためには「取材・撮影」「メディア編集」「企画・制作」「グラフィックデザイン」などの仕事を行う能力が求められます。取材・撮影では、受け手に伝わる、響く記事を作成するため、取材・撮影・編集・原稿制作までの全ての工程をこなします。メディア編集では、取材・撮影で得られた情報・コンテンツを企画コンセプトに沿って校正・整理して、各メディア(月刊誌・別冊・WEB)に最適な構成に組み立てます。企画・制作では、月刊誌などの特集はもちろん、広告・パンフレット制作から販促イベントなど、

「街を元気にする」企画であればカタチを問わず、立案・制作することが求められます。グラフィックデザインでは、企画・編集・制作したものを、より効果的に伝えるために文字・画像・イラストをデザインし、クオリティの高いビジュアル表現に仕上げていくことが求められます。

どのような課題に これから取り組んで いきますか?

「街の情報」というのは、「街の魅力・価値・文化」と考えます。街の魅力・価値・文化に感動すれば、人は動く。人が動けば街は動き、そして元気になる。その気づきと感動の場いかに創り出していかかまことに、私たちの使命です。そして、これからの街とつながり、街とともに生きるためにファンのみならず、街の魅力・価値・文化を共有、共感し、チャレンジを続けていきます。またより豊かに、より便利に、未来ある徳島にするためには新しい魅力・価値・文化をみなさんと共に創っていくことも、あわわの課題です。

つまりシンプルに言うと、徳島を元気に、面白くすることが課題です。徳島愛に満ちたあわわスタッフが日々街を歩き、街の人と出会い、その中で街の面白さを見つけ、それをみんなに伝えていく。さらに自ら、面白くも作り出す。これからも、時にやりやりに、時に真面目に、時にお洒落に、時に力強く みんなを面白がらせていきます。



挑戦するプロジェクトについて

『あわわ』の様々な業務を通じて、街とつながることを体感してもらいます。タウン誌の仕事は情報発信することが目的ではありません。街とつながり、街とともに生きる、徳島を元気にすることが私達の目的です。徳島に住む皆さん、ぜひあわわの仕事を通じて、徳島を元気にしましょう。

project 1000人と繋がる プロジェクト



【プロジェクトの目的】

あわわの仕事は、街、そして街をつづけている様々な人とつながること初めて価値が生まれます。ただ情報を収集・発信するだけではなく、その情報を持っている人とつながることで、より深く課題の背景を知り、解決のアイデア発見に近づけることができます。

皆さんには「あわわ」のメンバーとして、徳島のいろいろな人とつながりを作り、徳島の様々な課題を聞き取ってもらいます。

【具体的な活動】

あわわの業務を通じて、街とつながることを体感してもらいます。あわわの全ての仕事は基本的に人と出会い、関係を作っていくことから始まります。

例えば、新店や特集記事の取材、求人情報サイトの掲載店を集める営業、あわわ誌面の企画、街頭アンケートやインタビューなど、いずれの仕事もいろいろな人と関係を作らなければ進んでいきません。あわわのスタッフと一緒に仕事を進めていく中で、数多くの人のつながりが生まれます。

【求められる成果】

30日間で1000人となつていきましょう。さらに、つながった人に徳島の魅力と課題を聞いてみましょう。毎日の日報でつながった人から集めた魅力と課題を蓄積していきます。

1000人と出会った後は、1000個以上の徳島の魅力と課題が集まります。1000人の声を聞けば、徳島を元気に、面白くするには何をすれば良いか必ず見えてきます。



挑戦する学生へのメッセージ



あわわ代表取締役社長
岩佐乃介

『あわわ』は、こんな人求めています。さあ! 30日間、一緒に働いてみませんか? 「仲間を信じ、助け合う人」あわわの仕事は常にチームプレー。部署を超えて協力するという社風が創業時から伝承されています。「あいさつと笑顔を忘れない人」忙しい時はこそ、挨拶と笑顔を忘れない人が大好きです。「変化へのチャレンジ精神をもつ人」メディア、仕事スタイルも固定概念に囚われない新しいチャレンジが必要な時代。チャレンジしなかった後悔は、厳禁です。「常に未来思考が出来る人」アイデア・企画には、ハッピーな未来を。計画段階では慎重に、未来の「大小」も、未来の両面を俯瞰イメージできる力を求めています。「徳島が大好きな人」街とつながり、街とともに生きる」。スタッフ一人ひとりの徳島愛を結果し、街のみんなに愛されるメディア作りを目指しています。

プログラミングの面白さを 子どもに伝えるノウハウをつくる

これからの社会で重要性が高まっていくプログラミングについて
子どもが積極的に学びたいくなるような方法を見つけ出します。



徳島県徳島市
株式会社QLIP

どのような事業を 行っている 企業(組織)ですか？

QLIPは、徳島駅前教室のあるユニークな学習塾です。今までの学習塾とはひと味違った探究心と創造を育むワークショップ型探究講座と少人数型講座を提供することをミッションとしています。

2011年に小学校に入学した子どもたちの65%が、今はまだ存在しない職業に就くだろう。これは、アメリカの女性研究者が2011年にNYタイムズで語った言葉です。現在の教育は21世紀型の職業に対応した、21世紀型の学びのスタイルが求められています。その一つの鍵となるのがプログラミングです。

QLIP(グループ)とは、Qはクエスト(探究)Iはロジック(論理)IIは、インシューリング(問題解決)、Pはプレゼンテーション(発表・表現)を意味します。これまでの詰め込み型授業ではなく、HOW(どうして)とWHY(なぜ)を学ぶ能力を大切に、徳島の子どもたちが世界に通用するようになって欲しいと考えています。そのために、今までの学習塾(集団授業・個別指導)とはひと味違った、子供の探究心と創造を育むワークショップ型探究講座と少人数型講座(定員2名・4名)を提供しています。また、子供達がプログラミングを学び、自ら創り上げる面白さを知ってもらうためのプログラミングスクールを開講しています。



学習塾としては、特色のある様々な講座を運営しています。例えば「ロジカルシンキング」講座。与えられた情報を論理的に整理して考える方法を身につけることで、社会に出ても十分通用する

論理的思考力を養成する講座です。「探究・創造型学習講座」は、世の中の「なぜ」を研究者になりきって探究したり、誰も知っていない商品のアイデアをヒントに、アイデアを考えるコツを学んだり、様々な方法で創造力をつけていく講座です。

どのような課題に これから取り組んで いきますか？

21世紀型の仕事で最先端で切り拓いているのが「プログラミング」です。世界はいま、プログラミングの重要性に大きく注目しています。

これからますますITは我々の生活に密接に関わり、プログラミングが日常に根付いてきます。その中で、子どもへの頃からプログラミングを学ぶことが重視され始めています。日本でも小学校でのプログラミング教育の必修化が検討されています。

一方で、プログラミングは子どもの創造性を養うには最適なツールです。自分でプログラミングを組み立て、思い通りに動かすことは、創作活動そのものです。自ら考え、組み立て、楽しめる「プログラミング」は、特定の職業を目指した技術訓練ではなく、子どもの可能性を広げる知育玩具のようなものです。自分が創り出したプログラミングを周りに広め、社会や人とコミットしていく。このような社会性や情操を育むツールにもなるのがプログラミングです。

このような社会の背景を受けて、QLIPは子供達へもプログラミングを普及し、自ら創り上げる面白さを知って欲しいと考えています。子どもがプログラミングに関心を持つようなイベントの実施や、海外の教育プログラムの導入などを図ると、徳島で充実したプログラミング教育を提供できるように取り組みを進めています。



挑戦するプロジェクトについて

みなさんは「プログラミング教育」について、単にコンピュータプログラムの作り方を教わるようなイメージを持っていないでしょうか。実は「プログラムが作れるようになる」ことだけでなく、「論理的に考えるを組む力」、「順序だてて問題解決を考える」方法を学ぶことについても、教育上重視されているのです。今年の4月、文部科学省が小学校でのプログラミング教育の必修化を検討すると発表しました。社会の中でも認知され始めたこの社会課題に対して、「子どもに効果的にプログラミングを教える授業を考える」、「子どもにプログラミング教育の意義・面白さを伝える」の2点からアプローチしてもらいます。

project ① 世界のプログラミング 教育をリサーチせよ！

【プロジェクトの目的】

日本のプログラミング教育はまだ産声を上げたばかりです。いずれの教育機関も効果的な教育方法を模索しています。特に、座標や変数などの概念を教育課程の中でまだ教わっていない子どもに理解してもらう方法については、多くの指導員が頭を悩ませています。この課題について、海外の教育事例を参照しながら新しい方法を考案し、QLIPの教室で実践しながら検証を進めることで、効果的な教育プログラムを開発します。

【具体的な活動】

- 海外での効果的な教育事例を調査し、手法や指導方法についての分析を行う。
- 分析をもとに学習する子どもにとって適切な授業を設計する。
- 実施した授業の課題を検証し、改善した教育プログラムを提案し、報告会を行う。

project ② 子どもに発信！ プログラミングは面白い

【プロジェクトの目的】

QLIPではプログラミング教育の普及活動を行っています。ほとんどの子どもがゲームに興味があるにもかかわらず、そこから「プログラミングを勉強したい」「自分でゲームを作りたい」と考える子どもは少ないのが現状です。子どもは本当に興味がないのでしょうか。無関心の背景には、意義や面白さに気がついていない、難しいと考えている、きっかけがない、など様々な理由が考えられます。このような子どもが意識している日本語(インサイト)を明確にすれば、ターゲットの絞り込みも、今後の事業を展開していくうえで大きな情報になります。

【具体的な活動】

近隣の小中学校にアンケートを実施し、そこからプログラミングへの関心について意識調査を行います。次に、調査の分析をもとにグループ分け(カテゴリー)を行い、それぞれのグループの子どもの声を聞きながら、本音を探ります。さらに、グループごとの子どもの本音に応じて、プログラミングに興味を持ってもらうためのイベントの企画と運営を行います。イベント後にはアンケートを実施し、その効果と課題点を検証してもらいます。

【求められる成果】

- 小中学生のプログラミング教育への関心について本音を聞き出す。
- 本音をもとにグループ分けを行い、各グループへの有効なアプローチを設定する。
- アプローチに沿った普及イベントを実施し、その効果と課題となる点を検証する。



挑戦する学生へのメッセージ

はじめまして、学生の皆さんには、このインターンシップの参加を通して仕事内容の理解や自らの適正把握だけでなく将来のキャリア形成に是非とも役立ててください。学校とは異なる新しい学びの機会を通して人間的にも成長し、この経験を活かし社会で活躍することを願ってやみません。

プログラミングとITに興味のある方だけではなく、教師を目指す方もぜひ参加して下さい。わかりやすい伝え方や、授業に興味を持ってもらう方法を模索しながら授業構成を考え、実践し、フィードバックまで行うという経験は貴重です。ぜひこの機会を活用してください。チャレンジ精神のある学生の皆さんをお待ち申し上げます。



QLIP情報責任者
江本大輔



QLIP技術責任者
福島正清

5000人以上の人が集まる うだつマルシェを進化させる

14年続く地域の魅力発信マーケットの集客力を活用しながら
若い世代が地域に入ってくる土台づくりを考えます。



徳島県三好市
NPO法人マチソラ

どのような事業を 行っている 企業(組織)ですか？

四国で一番広い自治体である三好市は、「マチ」と呼ばれる四国の交通の要所として栄えた阿波池田と、「ソラ」と呼ばれる根谷や大歩危のある山間部があり、各地域で独自の建築様式の建物が残り、土地に根付いた暮らしが継々と続けられてきました。しかし少子高齢化に伴い、そのような歴史ある建物が空き家となり、地域での暮らしやコミュニティが存続の危機に立たれています。

NPO法人マチソラは、上記の課題を抱える三好市にて2012年に発足しました。三好市にある空き家や地域に残る伝統文化を活用した事業に取り組むことで、地域を盛り上げ、住民はもとより観光客等来訪者にとっても魅力あふれる地域であり、住んでみたい町づくりを目指しています。主な取り組みとして、「うだつマルシェ」、「マチソラ芸術祭」(伝える暮らしワークショップ)、「マチソラ学校」の4つがあります。うだつマルシェは、三好市近隣の作り手とお客の手作りのおいしいものやさまざまな雑貨が集まる一日マーケットです。三好市池田町のうだつ町並みの魅力発信と空き家の活用のために行っています。マチソラ芸術祭は、地域資源を活用し「マチ」と「ソラ」をアートでつなげます。三好市の民俗文化を舞台に、現代アートの展示やアーティスト本人によるワークショップを行うことで、そこに暮らす人の日々の生活に会いをもたらし、訪問者にも地域の魅力を伝えます。様々な人が集うことで、次の世代にならざる者が地域に魅力を感じ、交流を深め、新しい可能性を作る場を創り出しています。



伝える暮らしワークショップは、収穫体験や加工体験を通して山間部の昔からの暮らしの知恵を次世代に伝え、将来の耕作放棄地の再生につなげることを目的としています。三好市の敷地の多くを占める急斜面の山間部では、蕎麦や雑穀、茶、せんなど、土地を活かした伝統的な作物が代々作られてきました。かすら細工など、自生している植物を活用した産品も多く見られます。豊かな暮らしの知恵の残る山間部で現在も暮らし、じいちゃんややんを講師やガイドに迎え、季節ごとにワークショップを開催しています。

マチソラ学校は、遠距離地域での仕事や暮らしについて多角的に関わり考える場を作る取り組みです。四国内外で地域に根ざした活動をしている方が先生となり講座やワークショップを行います。四国のへそと呼ばれる交通の便のいい土地柄を活かし、四国四県の同志がゆるやかにつながりいきいきと活躍できる場になっています。

どのような課題に これから取り組んで いきますか？

地域活性化、地方の魅力発信をコンセプトに行ってきたうだつマルシェは今年で14年目を迎えます。当初の立ち上げ期と比較して人口動態も街の様相も少なからず変化してきており、うだつマルシェについて、現在の課題の解決を図る上で適切なイベントへと形を変えることが必要となっています。今後の地域の活性化、人口の定着などを視野に入れ、若い世代が地域に入ってくるための土台づくりをしたいと考えています。



挑戦するプロジェクトについて

NPO法人マチソラで中核となっている事業が5年前に発足した「うだつマルシェ」です。当初のコンセプトは、地域内における創業支援と地域の魅力発信でした。これまでの成果として、街の賑わいや地域資源を使った特徴的な事業などの定着の兆しが見えてきました。

これからの「うだつマルシェ」では、近年の社会状況の変化を反映させ、「若い世代が入って来やすい地域風土の土台づくり」をコンセプトに加えたいと思っています。今後さらに加速する人口動態や環境変化に対し、街の活力を生み続けるマルシェの形をみなさんと共に考えたいと思います。

project 若者を定着させる うだつマルシェを考える

【プロジェクトの目的】

三好市の高齢化率は40パーセントを超え、2010年から30年間で20歳から39歳の女性の人口減少率は77.9パーセントとされています。高齢化と人口減少が続く、2011年に三好市は「消滅可能性圏」に指定されました。

時を同じくして、うだつマルシェ、四国酒まつり、地域おこし協力隊などの地域活性化活動が活発に始まりました。うだつマルシェは現在までに15回開催し、平均5000人から10000人の集客があるイベントになってきました。

今後はイベント当日の交流人口を増加させるだけではなく、人が地域に定着するきっかけとなるイベントにプログラムを改善すると共に、今後、若い世代が入ってきやすい地域風土の土台づくりたいと思っています。このような視点から、うだつマルシェをよりよくなるための事前調査、当日調査を行い、次回以降のうだつマルシェについての改善提案を行っていただきます。

【具体的な活動】

まず、6月下旬に行われるうだつマルシェの企画と準備に参加し、イベントの内容を把握します。その後、若い世代が地域に定着する後押しとなるようにうだつマルシェを改善するために必要な情報を収集し、改善の方針を検討します。

具体的には、県外からうだつマルシェに出展参加し、その後三好市で起業した方々の取材から、起業を後押しするために運営に求められる条件を検討します。また、地域での起業支援に関する全国の取り組み事例を調査します。7月30日のうだつマルシェ当日は、来訪者と出展者に対してアンケートと聞き取り調査を実施します。

【求められる成果】

- これまでのマルシェが若者の定着に果たした役割についての評価を行い、今後の改善点を指摘する。
- 若者の定着を目的とした全国取り組み事例の調査をもとに、三好市の状況に効果的なプログラムを提案する。
- うだつマルシェを改善していく方針と、今後のうだつマルシェで実施するプログラムを提案する。



挑戦する学生へのメッセージ



マチソラ理事長
横山真志

みなさんのような10代、20代の意見をイベントに取り込めることや、インターン生が地域に入り活動することで、三好市に新しい息吹が吹き込まれることになりま。プロジェクトを通じてこれからのうだつマルシェや、三好市に様々な提案を行ってください。

20代での視野の広がりは大きな可能性につながります。大学生の時期に

公益を考えた事業に接することで物事を俯瞰する視点を身につけ、疲弊する地域を救うために奔走した経験は、将来の学びや仕事に大きな広がりをもたらしてくれるでしょう。

三好市池田町の伝統的な商家のうだつマルシェのまちなみの中で、みなさんの積極的な挑戦をお待ちしています。

アグリビジネスを成功させる webコミュニケーションを考える

全国にいる小松島市のブランドトマト「ももりこ」の購買者と農園のコミュニケーションを取り持つホームページをデザインします。



徳島県小松島市
有限会社椋山農園

どのような事業を行っている 企業(組織)ですか?

椋山農園は山々に囲まれた自然豊かな土地柄で、名水が湧き出る地としても知られている徳島県の小松島市で、フルーツトマト「ももりこ」と小松島ブランド米「泣く子もだる米」の生産を行っています。ももりこは10年間栽培方法に工夫を重ねてきた非常に

しっかりと秋処理をした田んぼには、生物の害になる硫化水素が発生しません。ということは、ひと昔前まではとさひんた、カエルなどの小さな生物たちが、田んぼに集まっていた。こうした小さな生物が土の中を動き回ることによって、土がドロドロの状態になり稲の成長を妨げる雑草の種が沈んで除草剤の散布が必要なくなります。



このように、できるだけ有機肥料や生物の力を借りることにより、国が定める慣行農業の基準値と比べ、化学肥料や農薬を使う割合を半分近くまで減らすことができました。特にお子様のご家庭では、安心してお召し上がりいただくことができる自負しています。

どのような課題にこれから取り組んでいきますか?

椋山農園はブランド農産物の開発と販売に力を入れているため、単独の農家としては多い4種類の品目の管理を行っています。また、事業を急激に拡大してきたことから、組織として経営業務ができるような仕組みを整えることが必要になっています。社長や専務が現場にいないと業務が回らないのが現状です。各事業部署を担うことができる人材を育成し、権限を移譲していくことが必要です。商品の受注業務、お客様対応、情報発信方法の整理など、販売に関わる様々な業務をwebサイトと組み合わせることで円滑化していくことも重要な課題と考えています。

糖度の高いトマトです。普通のトマトの糖度は5程度、一般的なフルーツトマトは糖度8~10度という商品がほとんどの中、ももりこは糖度10~12とかなり甘い。

さらに、一般的にフルーツトマトは水を切り、塩分でストレスを与えることで旨味が増すという手法が用いられています。しかし、椋山農園では過度のストレスを与えることで、皮が硬くなり実にくみが出てしまわないよう、水をふんだんに使用した栽培を行っています。ももりこは甘いのに柔らかいのです。



泣く子もだる米は、有機と生物多様性、2つの試みを取り入れた農法で作った徳島産コシヒカリです。いいお米を作るためには、前年の刈り取り直後からの手入れが必要で、椋山農園では、収穫後の稲の切り端が次年度の稲に悪い影響を与えないように、きれいに分解させるための土壌改良を毎年行っています。これによって稲が健康に育ち、たくさんのお米が実ると同時に、美味しいお米が出来上がります。

挑戦するプロジェクトについて

徳島市に隣接する小松島市に農場を持つ椋山農園ではブランド農産物の開発と販売に力を入れることで、急速に業務が拡大しています。農業だけでなく、販売管理や顧客とのコミュニケーション、ブランディングや情報の発信など、取り組まなければならない会社としての課題もたくさん出てきています。今回のプロジェクトではこのように急成長する6次産業の企業の課題と向き合い、webサイトの構築を通して業務を円滑化する工夫を考えていきます。

project 6次産業の企業を支えるwebサイトを検討する

【プロジェクトの目的】

これまで椋山農園の商品の販売は市場を中心に行っていました。毎年買いに来ていただくお客様や、ご紹介、ご贈答など、多くのお客様に好評をいただいています。しかし近年、全国から発送依頼が増えました。より多くのお客様に「ももりこ」を「泣く子もだる米」をお届けしたいと考え、インターネットでの販売を開始しました。現在、商品を販売するだけでなく、インターネットを通じてお客様とコミュニケーションする方法を模索しています。

こうした課題に対応して、椋山農園や商品を好きになってもらうための情報を発信する、より満足してもらえる商品を提供できるようにするために、お客様とのコミュニケーションを図る、等の課題に応えられwebサイトのデザインを具体的に検討することがプロジェクトの目的です。

【具体的な活動】

椋山農園の特徴的な商品の情報を発信し、お客様と交流し、購買に結びつけるためのwebサイトのグランドデザインを行います。その際、弊社の事務員が従来行っている広報や販売管理の仕事との関係も考える必要があります。

プロジェクトでは、まず椋山農園の従業員にヒアリングを行いながら、販売・広報業務上の課題を整理します。また、商品についての考え方や特徴を元に、webサイトで発信する内容を整理し、デザインのコンセプトを検討した企画書を作成します。さらに、可能であれば実際のwebサイト作成まで進めていきます。

【求められる成果】

webサイトに掲載する要素が全て整理され、作成に取りかかる状態の企画書を作成して下さい。企画書にはwebサイトの構成の他、椋山農園らしさが出る視覚的なデザイン、商品を発信するための適切な写真やコピーライティング(宣伝記事)、椋山農園の従業員の取材やインタビューを構築した記事等も取りまとめ、webサイトの構築が始められる手前の段階まで進めてもらいます。



挑戦する学生へのメッセージ



椋山農園販売責任者 椋山直樹

農業を成長産業に育てる方法は、今の社会の大きな課題になっています。椋山農園もこれから大きく成長したいと考えていますが、webサイトの充実がそのための大きな鍵になるでしょう。webサイトは会社の顔になりますので、みなさんには会社の顔の段階で椋山農園の経営や広報、ブランディングの方針など、経営に関する様々な課題に触れていただきます。企画・作成していただいたwebサイトは実際に活用したいと考えています。みなさんと一緒に、椋山農園の成長に取り組みることを楽しみにしています。

多様な地域資源を活用した地域活性化の拠点づくり

四国で最も人口の少ない町上勝町。国内のみならず海外からも注目されている、多様な地域資源を活用した上勝町の取り組みを学びます。



徳島県上勝町
徳島大学上勝学舎

どのような事業を行っている 企業(組織)ですか?

徳島大学地域創生センター上勝学舎は、徳島大学と徳島県上勝町が連携運営する中山間ビジネス創出のための人材養成拠点です。上勝町は徳島県勝浦郡の勝浦川上流に位置する人口1,699人(2016.1.1現在)の町です。ICTシステムを活用した

業つばビジネス「いろどり」の開発し、モノを廃棄せずにリサイクルさせるゼロウェイストの考え方や実践、バイオマスによる低炭素社会化などで大成功をおさめ国内のみならず海外からも注目を集めています。

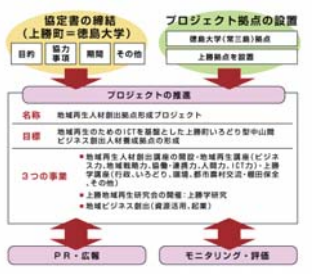
上勝学舎では、いづれのような、豊かな自然とコミュニティを基盤とした低炭素型でかつ強く、持続性の高い地域社会形成を支える中山間ビジネスモデルを創出することのできる人材の養成を目的として、レジデント型拠点として次の3つの事業を行っています。

一つ目は、農山漁村地域の人材育成を図る教育です。上勝町での活動見直しを旨として、ビジネス力、地域戦力、協働・連携力、人間力、ICT力などを鍛え、徳島県下の山村や全国過疎地などで、プロフェッショナル、プレイヤー、コネクタの役割を担って活躍できる人材を育成しています。



二つ目は、人材育成の基礎となる研究です。農山漁村地域における「課題解決」「価値創造」の視点を持って、上勝町での地域再生活動を中心に中山間地域の活性化・再生に関する知見・資料を集積し、上勝モデルの構築、成功を導いた要因の分析・失敗学、関連する領域の研究者のネットワーク化などの展開を行っています。

三つ目は、農山漁村地域の支援連携です。上勝町には、自治体や大学などの他、NPOやグリーンツーリストなど様々な団体が情報収集や地域活動に訪れます。これらの団体の地域活動を支援するハブ施設、そして地域に滞在して行う研究の支援施設として、学舎の運営を行っています。



どのような課題にこれから取り組んでいきますか?

上勝町の循環型地域運営モデルと「いろどり」事業を教材に、上勝町の地域活動力のさらなる形成と強化に取り組み、地域人材創出、中山間地域ビジネスモデルの開発、それに基づく起業実験から、実際のビジネスの立ち上げまで実践していきます。具体的には、①地域創生人材創出、②里地・里山ビジネスモデル開発、③里地・里山ブランド開発、④情報リテラシーの形成、⑤ボランティア連携実践、5つの事業に取り組んでいきます。

挑戦するプロジェクトについて

「里地・里山ブランド開発」の課題に関わるプロジェクトとして、上勝町内に存在する地域資源のブランディングや広報戦略の作成に挑戦してもらいます。いずれのプロジェクトにもフィールドワークがあるので、コミュニケーション力や、マーケティング力が高まります。調査内容を様々な形でPRするので、デザインや広報の力なども身につきます。これらを上勝にしかない魅力や日本全国へ、世界へ発信していくためには、若い人の力が不可欠です。ぜひ、一緒に上勝プロジェクトに取り組みましょう。

project ① 集落得意技調査

【プロジェクトの目的】

地域の過疎や高齢化の課題解決につながる調査を行います。日本の中山間地域の多くでは過疎と高齢化が同時進行し、地域社会の維持が難しくなっています。このような集落を持続可能なものにするには、そこに暮らす人々の知恵や力を共有し、その地域の特徴に応じた新たな地域社会の仕組みを作っていくことが必要です。自然や周辺の環境だけではなく、そこに住まう人々の知恵や力も人的資源として、地域の重要な資源なのです。人々の知恵や力を活用していくために、地域の活動グループや得意技を持つ個人などを調査し、どのようなユニークな人がそこにいるか地域で共有することが、プロジェクトの目的です。

【具体的な活動】

調査票に基づいて数人のグループで集落を訪問し、地域に住民の方とインタビューを行います。インタビューでは、対象者のこれまでの暮らしの歴史(ライフストーリー)や職業経歴、趣味の履歴などを聞き取り、その人固有の得意技を発見していきます。

【求められる成果】

地域の個性的な人と得意技の情報をまとめた「集落得意技リーフレット」を作成します。リーフレットを地域に配布することで、地域の方が身近な人の得意技に気がつきやすくなります。さらに、リーフレットは今後の地域づくりの参考資料として様々な場面で活用されます。



project ② かやぶき民家利用促進

【プロジェクトの目的】

現在、上勝町では空き家の増加が問題になっています。来訪者が畑から作物を直接購入し、かやぶき民家で調理し、食し、ゆるやかな時間を過ごす。加えて地元集落住民も活用できるような滞在型観光と集落利用のハイブリッドな活用はできないでしょうか。プロジェクトでは、このようなスタイルの空き家活用を実現するために、かやぶき民家の拠点化及び、生産者と消費者の間に農協や直売所を挟まず各畑で直売する農場(オープンファーム)の現状や課題を明らかにし、集落住民利用型の滞在型観光を促進する方法を考えてもらいます。

【具体的な活動】

上勝町八重地区において、かやぶき民家、オープンファーム及び集落に関する資源把握、魅力度調査、マーケティング概要調査を行います。さらに、調査結果に基づいた適切な滞在型観光及び集落利用のハイブリッド促進戦略を考えてもらいます。現時点では、来訪者に向けたマップ作成や、SNSを用いた情報発信などを想定しています。日程があれば、実際のオープンファームに参観してもらいます。

【求められる成果】

かやぶき民家が滞在型観光の拠点かつ集落利用として活用するための総合的な戦略を作り出してください。単に方針を立てるだけではなく、モデルとなるような活用事例を考え、実際に来客を招いて課題を聞き取り、実際にPRに行き、効果を検証するなど、効果的に広報するための具体的な有効な手法を提案していただきます。



project ①
棚田資源の
ブランディング



【プロジェクトの目的】

上勝町の棚田は、「日本の棚田百選（農林水産省）」「重要文化的景観（文化庁）」「重要里地・里山（環境省）」に選ばれているなど、文化・景観・生物多様性等の観点からその価値が高く評価されています。しかしながら、現在、棚田資源の活用やPRは十分とはいえません。そこで、棚田資源のブランディングを行い、効果的なPR活動を検討・実施することで、①「棚田訪問者を増加させる」、②「棚田のオーナーになりたい人を増やす」、③「棚田の新たなファンを作る」の三点の課題に取り組みます。



ミッション①「棚田訪問者を増加させる」

【具体的な活動】

上勝町内の棚田を巡り、保全活用活動に取り組む関係者などへ聞き取り調査を行い、発信すべき魅力についての情報収集と整理を行います。並行して、情報を発信する対象や、適切な媒体の検討（SNSや観光アプリ等、広報媒体情報の整理）を行います。以上の調査結果をもとに、ブランディングの方針を検討し、適切な情報発信を行います。



【求められる成果】

実際に広報媒体を使って、棚田のPRを行っていただきます。PRについては、閲覧数や訪問者の増加など、広報効果の事後評価の方法まで含めて検討していただきます。

ミッション②「棚田のオーナーになりたい人を増やす」

【具体的な活動】

高齢化や後継者不足により増加する棚田の耕作放棄地。棚田オーナー制はそんな状況を打開するために、上勝町では、2005年より始められました。棚田オーナー制度は、主に都市住民に会費制のオーナーになってもらい、一定の田・畑・果樹を割り当て、収穫物をオーナーに持ち帰ってもらうものです。現在年間300組の応募がありますが、まだまだオーナーを募集している棚田があります。そこで、棚田オーナーを増やすための手法を検討するために、棚田の視察や運営関係者、現在のオーナーの方々への聞き取り調査を行います。調査した情報をもとに、効果的なPRの仕組みを考え、実際にPR活動まで行っていただきます。



【求められる成果】

取り組みの結果、棚田オーナーは増えるでしょうか。PRした情報から問い合わせがあった件数、オーナーになった件数については、後日みなさんにお知らせします。大きな成果が出る方法を考え出してください。



ミッション③「棚田の新たなファンを作る」

【具体的な活動】

「五感で感じる棚田」。視覚としての「景観」、触覚・味覚としての「オーナー制」に加え、「棚田を流れる水の音」という聴覚に訴える「サウンドスケープ」の観点から新たな資源のブランディングを行います。そのために、集落内の棚田を巡り、水音や情景のデータを収集します。次に集めたデータをもとに、音資源のある場所を地図上にプロットした「サウンドスケープマップ」を編集します。最後に、まとめた情報をリーフレット、SNS、動画サイトなどを通じて発信します。



【求められる成果】

棚田の音風景が、離れた地域の方にも伝わるような写真・動画・イラストなどのPR媒体を作成していただきます。実際に現場を体験した上で、最も良い方法を考え出してください。

挑戦する学生へのメッセージ



上勝学舎客員教授
澤田俊明

四国で最も人口が少ない町、上勝町は、さまざまな魅力ある活動が展開されており、国内、海外からも注目されている魅力ある町です。しかしながら、持続可能な地域づくり・集落づくりには、まだまだ多くの課題に直面しています。

今回のプロジェクトのフィールドは、上勝町の棚田です。現地を訪れる

と日本の原風景ともいえる300年前の江戸時代の風景が、眼前に広がります。この棚田風景を守りそして活用したい。学生の皆さんの積極的な参加をお待ちしています。

サテライトワーク先進地域で行う
インターンシップを企画する

あたらしい働き方を知ることができるインターンシップを
徳大生みんなで作って創り出そう。



インターンシップ
番外編

徳島大学COC+推進本部
あたらしい暮らし方働き方開発ラボ

どのような事業を
行っている
企業（組織）ですか？

徳島大学のCOCプラス事業は、徳島にとってこれら課題となる分野、これから成長が見込まれる分野について、学生が学ぶ環境を、徳島の企業や自治体とも連携しながら創り上げていくことを目的に活動しています。具体的には、「LED・自動車・ロボット等の次世代技術」

「地域医療・福祉」「6次産業化」「地域づくり・観光・ICT」分野において、徳島の具体的な課題とともに学び、実際の地域社会において活躍できる能力を学生に身につけてもらうための大学や、地域社会のあり方を模索しています。

「あたらしい暮らし方働き方開発ラボ」（愛称「あたらぼ」）は徳島大学がCOCプラス事業を進める中で、実際に徳大生がどのような働き方をしているのか、学生の生の声を聞きながら事業を進めるために、協力してくれる学生が集まってもらうことからスタートしました。現在10名程度の徳大生に手伝ってもらい、ワークショップの形式で仕事に対する思いや、将来の働き方について意見交換しながら、学生にとって必要となるプログラムの検討を進めています。

どのような課題に
これら取り組んで
いきますか？

今後徳島大学は、今回のような実践力養成型のインターンシップを学生に提供できる機会を増やしていきたいと考えています。その中で、できるだけ多くの徳大生の声を聞き、徳大生が自分のキャリアのために身につけた能力が鍛えられることが

課題であると考えています。参加者の声を反映させた優れたサービスを開発するための手法として、「ワークショップデザイン」という考え方があります。これは、サービスの設計や開発の初期段階からサービスの受け手を積極的に巻き込み（include）、対話や観察から得た気づきをもとに、受け手にとって使いやすい、魅力的なサービスを生み出すデザイン手法です。

教員や企業の側からインターンシップを開発するだけでなく、学生にも企画者として参加してもらいながら、学生が成長が実感してもらえる、また成長の可能性がプログラムから伝わるインターンシップのカタチを作り出すことはできないでしょうか。



挑戦するプロジェクトについて

今回のインターンシップフェアでは、8つの企業（組織）に学生が実社会での課題に取り組みながら将来の働き方考えるためのプログラムを提示してもらいました。みなさんの考えるキャリアに対する学びとなるプログラムは見つかりましたか。大学生生活において、自分の将来のためにどのように学ぶか考えることは大切です。提供されたプログラムの中に自分の希望する学びが見つからない場合は、自分で探そう、作ることも挑戦してみてください。

今回、番外編としてみなさんが自分たちでインターンシップを企画するプロジェクトを用意しました。対象となる地域は、サテライトワーク（大都市から離れた地域にオフィスを設け、インターネット環境を活用して大都市にいるのと同じように仕事を進める業務形態）の先進地域として着目されている徳島県の神山町です。これからです時代を先取りした、新しい暮らし方働き方を体験するインターンシップを、自分たちで企画してみませんか。

【番外編】project
サテライトワークを
体験するプログラムを
企画しよう

【プロジェクトの目的】

情報通信技術の発展を受け、特にITなどの分野において場所や時間に拘束されず、柔軟に働くことが可能になりました。クラウドによる情報共有や勤怠管理が日常化したIT企業にとって、都会のオフィスに社員全員を集める雇用形態はもはや必須ではありません。自宅を利用したテレワークの他に、大都市から離れた地域にオフィスを設けることで、賃料を抑えつつ、豊かな自然の中で「居住接近」の働き方を実現する、サテライトワークも注目を浴びています。徳島県神山町は、徹底したITインフラ整備と豊かな自然環境で、サテライトオフィスを設ける企業の誘致に成功した地域です。

神山町にある「えんがわオフィス」は、株式会社プラトイーズのサテライトオフィスのニックネームです。本社は東京・恵比寿にあり、そこでは約80名が働いています。えんがわオフィスでは2013年7月から業務を開始しており、現在では約20名がTV放送に関する業務や映像のアーカイブ業務を行っています。働いているのは全員徳島県民で、半分の10名ほどが神山町民です。築90年の古民家を改修した建物で屋内は最新設備、外観は全面ガラス張りの古民家に大きな縁側が付いているオフィスです。

プロジェクトでは現地の企業の方々の協力を得て、神山町におけるサテライトワークの、あたらしい暮らし方働き方を体験できるインターンシップのプログラムを考えます。

【具体的な活動】

えんがわオフィスをはじめとし、神山町の幾つかのサテライトオフィスで働く方、特に都市部から移住してきた方の動機や、暮らしの変化も着目しながらヒアリングを行い、神山町での暮らし方働き方の特徴を調べます。調査結果をもとに、神山町での働き方を伝えるのに適したインターンシップを企画します。

【求められる成果】

神山町におけるサテライトワークの暮らし方、働き方の特徴と、その魅力が伝わるインターンシッププログラムを企画していただき、さらに、企画したプログラムについて、企業の方へのプレゼンテーションや交渉を通して、実現できる案へブラッシュアップしてください。



挑戦する学生へのメッセージ



徳島大学COC+推進本部 特別准教授
川崎克寛

物質的に豊かになった社会は、一方で複雑化していますが、「幸せになる道」を社会が教えてくれるわけではありません。自分自身で見つける力が求められています。現代社会において、何のために働くのか、どう生きるのかを、あらためて見つめ直すことが必要です。小さな行動の積み重ねが自分を深めることとなります。まずは、触れてみる、出

会うための一歩を踏み出すことから挑戦してください。必ず、見たことのない自分に出会うことができます。今回の様々なプロジェクトを通して、自らの選択で行動し、本当に大切にしたいことを大切にして、ポジティブに未来をつくる人が一人でも増えて欲しいと願っています。